

世界遺産と観光振興 —インドネシア・バリ州ジャティルイ村の事例—

ニ・ヌンガー・スアルティニ

World Heritage Recognition and Tourism Promotion : A Case Study of Jatiluwih Village, Bali, Indonesia

NI NENGGAH SUARTINI

要旨：本稿では、世界遺産登録後の観光振興についてインドネシア・バリ州ジャティルイ村の事例によりながら考察する。その際、①日本人観光客を対象とするメディアがどのようにして観光宣伝を行ったのか、②また現地コミュニティは急増する観光客に対応して、どのような観光政策を立てたのかという二点に着目する。

世界遺産の登録はその地域に様々な影響をもたらす。その一つは世界遺産に登録された地域の観光開発の促進である。世界遺産の登録に伴い、知名度が高まるためその地域を訪れる観光客は急増する。本稿の事例であるインドネシア・バリ州タバナン県のジャティルイ村も例外ではない。ジャティルイ村の棚田は2012年7月、文化的景観としてバリ州で初めての世界遺産に登録された。登録する前のジャティルイ村の主な産業は農業であった。世界遺産登録後は観光地として知られるようになり、ジャティルイ村の広大な棚田の景観を楽しむために訪れる観光客が一段と増加するようになった。こうした状況に対応して、ジャティルイ村の現地コミュニティは、農業と観光業の両立を理想とする観光政策をしかけて観光を振興することを目指している。

本稿では、まずジャティルイ村を宣伝する日本人観光客向けの活字メディアや電子メディアを取り上げ、世界遺産というブランドを持つ魅力をどのように観光振興に結びつけているかについて分析する。次いで、農業と観光業の両立を理想としてしかけた現地コミュニティの観光政策について考察する。

キーワード：世界遺産、インドネシア、バリ州、ジャティルイ村、観光政策、持続可能な観光

はじめに

本稿で取り上げるインドネシア・バリ州タバナン県のジャティルイ村は、2012年7月にバリ州初の世界遺産に登録された。それ以前のジャティルイ村は、観光地としてそれほど有名ではなかった。その理由はジャティルイ村の立地条件である。ジャティルイ村はクタやウブドというバリ島の代表的な観光地から遠く離れており、交通のアクセスが不便である。こうした事情から、ジャティルイ村は、世界遺産に登録される以前は、観光地としてあまり宣伝されていなかった。当時、ジャティルイ村を訪れる観光客の大半は欧米人であり、かならずしもジャティルイ村を目的に訪れたのではなかった。彼らは、バリ島の山道や農村風景を楽しむランドクルーズのツアーの途中に立ち寄るだけであった。しかし、ジャティルイ村が文化的景観として世界遺産に登録されてからは、観光客数は著しく増加した(図1)。また、欧米人だけではなく、日本人観光客数も急増している(図2)。そして、それまではツアーの途中で短時間立ち寄るだけだっ

たが、棚田を散策したり、バリの在来品種である赤米の収穫に参加したり、長時間過ごすようになった。観光客の増加は観光収入の増加につながり、地域経済を活性化させる。こうした経済効果への期待はタバナン県だけではなく、ジャティルイ村においても大きい。

だが、世界遺産登録後のジャティルイ村の観光振興についての実証的な研究は少ない。その数少ない先行研究として、ジャティルイ村を事例に農村ツーリズムと観光開発について論じた Made Heny Urmila Dewi (2013) の研究がある。この論文のなかで、Dewi は、農村ツーリズムにおける現地コミュニティ参加の重要性を指摘してはいるが、ジャティルイ村については、タバナン県の行政の指導の下で観光振興が図られており、現地コミュニティは観光振興に関わっていないと結論づけている。また、この論文のなかでは、世界遺産登録後の観光客数の変化について述べられていないし、農業と観光業の両立という目指すべき持続可能な観光政策の理念についても触れていない。しかし、筆者が行った2014年8月の現地調査からは、増大する観光客に対応して、ジャティルイ観光管理運営組織およびジャティルイ観光運営マネジメントが設立されて、観光振興を図りながらも、農業を継続して棚田の景観を維持し、持続可能な観光を目指す努

力が続けられていることが明らかにされた。

本稿では、先行研究において欠落していた点や問題点を補い、世界遺産登録後のジャティルイ村における観光振興の現状について論じる。その際、現地コミュニティの果たす役割の重要性をクローズアップする。また、世界遺産登録後、増大する日本人観光客を対象とする活字メディアや電子メディアに着目して、世界遺産というブランド化を持つ魅力が観光振興に与える影響を明らかにする。

1. 世界遺産

1.1 世界遺産の定義

まず、世界遺産の定義、世界遺産に登録するための基準、インドネシアにおける世界遺産について説明する。

近年、様々な活字メディアや映像メディアや電子メディアの観光ガイドのなかで、「世界遺産」という言葉がよくでてくる。たとえばテレビでは、『The 世界遺産』や『シリーズ世界遺産100』などの番組をととして世界中の世界遺産が取り上げられている。また旅行会社では『世界遺産を巡るツアー』も組まれている。特に、観光をめぐる情報において、世界遺産は観光客の関心を惹く重要なキーワードになっている。世界遺産はなぜ観光地として高く評価されるのであろうか。それは以下のような世界遺産の定義を見ると理解される。

人類が歴史に残した偉大な文明の証明ともいえる遺跡や文化的な価値の高い建造物、そして、この地球から失われてはならない貴重な自然環境を保護・保全管理することにより、人類にとってかけがえのない共通の財産を世界に継承していくことを目的に、1972年のユネスコ総会で採択された「世界遺産条約」に基づく「世界遺産リスト」に登録されている物件のことです。

(古田陽久 2007:14)

上記の世界遺産の定義を見ると、「偉大な文明の証明」、「価値の高さ」、「地球から失われてはならない」や「人類にとってかけがえのない共通の財産」といった言葉で表現されている。こうした表現からは、世界が認める貴重な財産であり、世界が保護し、保全管理するに値する人種共通遺産であること強調されていることが分かる。つまり、こうした世界遺産の特質に観光客は魅力を感じると考えられているのである。

世界遺産は有形の不動産が対象であり、三つのカテゴ

リーに分かれている。一つ目は、文化遺産という顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観などである。たとえば、法隆寺地域の仏教建造物（日本）、ボロブドゥル寺院遺跡群（インドネシア）、アンコール遺跡（カンボジア）などである。二つ目は、自然遺産であり、顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息・生育地などである。たとえば、小笠原諸島（日本）、コモド国立公園（インドネシア）、ハロン湾（ベトナム）などである。三つ目は、複合遺産であり、文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えているものである。たとえば、黄山（中国）、タスマニア原生地域（オーストラリア）、ピルネー山脈—ベルデュ山（フランス）などである。

1.2 世界遺産に登録される基準

世界遺産として認定されるためには、世界遺産登録基準の10項目のなかからいずれか一つ以上に合致しなければならない。その基準は以下のとおりである。

1. 人間の創造的才能を表す傑作である。
2. 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
3. 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。
4. 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。
5. あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）。
6. 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
7. 最上級の自然現象、又は、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。

8. 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。
9. 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。
10. 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。
- (日本ユネスコ協会連盟「世界遺産の登録基準」のウェブサイトより2014年8月7日取得)

世界遺産は、1972年の第17回 UNESCO 総会で採択された世界遺産条約、形式的には『世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage)』の中で定義され、2014年9月現在、条約加盟国は191ヶ国である。世界遺産条約の目的は文化遺産及び自然遺産を人類全体のための世界の遺産として損傷、破壊等の脅威から保護し、保存するための国際的な協力及び援助の体制を確立することである。ドーハ（カタール）で開催された第38回の世界遺産委員会会議（2014年6月現在）のデータによると、世界文化遺産の総数は1007件である。その中でそれぞれ分類は、文化遺産が779件、自然遺産が197件、複合遺産が31件である。

1.3 インドネシアにおける世界遺産

インドネシアは1989年に世界遺産条約を批准し、1991年に初めて世界遺産に登録するようになった。表1は、インドネシアにおける世界遺産の一欄である。1991年に一気に4件が登録された。次いで、1996年、1999年、2004年に1件ずつ登録され、文化遺産や自然遺産は2014年までに8件が登録された。また、世界遺産の暫定リストには26件の物件が記され、文化遺産は18件、自然遺産は8件である。この世界遺産の暫定リストからは、インドネシアで世界遺産への登録を目指す動きが活発化し、登録される物件がこれからも増える可能性があることが分かる。

本稿で取り上げるジャティルイ村の世界遺産は、インドネシアで最も新しい8番目の世界遺産であり、バリ島にとって初めての世界遺産となった。バリ島の世界遺産

表1 インドネシアにおける世界遺産

No.	登録年	分類	名称	地域
1	1991	文化遺産	ボロブドゥール寺院遺跡群	中部ジャワ州
2	1991	自然遺産	コモド国立公園	東ヌサ・トゥンガラ州
3	1991	文化遺産	ブランバナン寺院遺跡群	中部ジャワ州
4	1991	自然遺産	ウジュン・クロン国立公園	バントゥン州
5	1996	文化遺産	サンギラン初期人類遺跡	中部ジャワ州
6	1999	自然遺産	ロレンツ国立公園	パプア州
7	2004	自然遺産・危機遺産	スマトラの熱帯雨林遺産	アチュー州、西部スマトラ州、南部スマトラ州、ブンクル州
8	2012	文化遺産	バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム	バリ州

出典：UNESCO ウェブサイトをもとに作成

登録は美しい自然を保全するスバックの役割が評価されたことによるものである。スバック (subak) とはバリ特有の灌漑組織であり、日本語で水利組織や水利共同体と訳される (永野由紀子2009:186)。本稿では、バリ語の「スバック」を片仮名でそのままを使用する。バリ島の世界遺産は、スバックを通して農業とヒンドゥー教徒であるバリ人の宗教生活とが強く結ばれていることが評価されて実現された。この点に関しては次頁で改めて検討する。

2. バリ島の世界遺産とトリ・ヒタ・カラナ

2.1 「文化的景観」としての棚田

バリ州唯一の世界遺産は2012年7月6日に文化遺産として登録された。正式名は、Cultural Landscape of Bali Province: the Subak System as a Manifestation of the Tri Hita Karana Philosophy であり、日本ユネスコ協会連盟による日本語訳は「バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナ哲学に基づくスバック灌漑システム」である。

ジャティルイ村の棚田の景観は文化的景観である。文化的景観 (Cultural Landscape) は1992年12月にアメリカ合衆国のサンタフェで行われた第16回世界遺産委員会で導入され、自然と融和した形で人類による手が加えら

れた景観であり（安江 2011:36）、人間と自然環境との共同作品とも言える景観である（古田2007:22）。

バリ島の世界遺産に登録された対象地の面積は19,500ヘクタールであり、そのなかで17,336ヘクタールはスバックの面積であり、その残りは水神様を崇拝する寺院の敷地の面積である。世界遺産として登録された遺跡は以下の5ヶ所であり、タバナン県、バンリ県、バドゥン県、ギアニャール県というバリ州の四つの県を占める。それは以下のとおりである。

表2 2012年に登録されたバリの世界遺産

番号	地区	名称
1	タバナン県	バトゥカウ山保護地区スバック（棚田）の景観（Subak Landscape of CaturAngga Batukaru）
2	バドゥン県	タマン・アユン寺院（Royal Water Temple Pura Taman Ayun）
3	バンリ県	バトゥール湖（Lake Batur）
4	バンリ県	ウルン・ダヌ・バトゥール寺院（Supreme Water Temple Pura Ulun Danu Batur）
5	ギアニャール県	パクリサン川流域のスバック（棚田）景観（Subak Landscape of Pakerisan Watershed）

ジャティルイ村の棚田は表2の番号1「バトゥカウ山保護地区スバック（棚田）の景観」にあり、バリ州の世界遺産の一部である。「バトゥカウ山地区スバック（棚田）の景観」には、ジャティルイ村の棚田を中心に、湖、バトゥカウ山¹⁾、巨大な寺院、スバック寺院が含まれている。

世界遺産に登録されるまではかなりの時間を要した。その経緯を説明すると、まず、2001年から世界遺産の申請に向けて準備が始まり、2003年にユネスコに申請した。だが、ジャティルイ村のスバックだけでは面積が不十分であるという理由から、2004年は暫定リストに載せるだけにとどまった。その後、世界遺産の登録を目指すために、スバックの面積を拡大し、農業に欠かせない水源の湖や山、寺院も取り入れて、「バトゥカウ山保護地区スバック（棚田）の景観」という名前で2008年に再びユネスコに申請し、2012年7月6日に世界遺産として登録された²⁾。

こうして、水源の山や豊かな水を湛える湖や農耕儀礼を行うための寺院を含めて、その全てが一体となって評価されたのである。

2.2 トリ・ヒタ・カラナの精神

バリ州の文化的景観が評価されるのは、棚田、湖、寺院のような地形や建造物だけではなく、「トリ・ヒタ・カラナ」と呼ばれるバリのヒンドゥー教哲学に基づき、スバックを運用しているためである。

「トリ・ヒタ・カラナ」とはどういう意味だろうか。その語源はサンスクリット語にある。すなわち、「トリ（Tri）」は3、「ヒタ（Hita）」は調和、幸せ、喜び、そして「カラナ（Karana）」は理由や要因を表す。つまり、「トリ・ヒタ・カラナ」とは「調和を実現するための三つの要因」という意味である（I Ketut Wiana 2007）。

以下で述べる「トリ・ヒタ・カラナ」の精神の説明は、筆者が小さい頃から両親や学校の先生といった周りの大人による口伝えで教えられてきたものである。

「トリ・ヒタ・カラナ」とは、人間はこの世の調和を実現するために宗教的な側面では人間と神、社会的な側面では人間と人間、環境の側面では人間と環境、という三者の調和的な関係を強調するヒンドゥー教の教えである。この三つの関係は、バリ語ではパラヒャンガン（Parahyangan）、パウオンガン（Pawongan）、パルマハン（Palemahan）という言葉で表される。この三つの要素（神、人間、環境）のなかで、人間は主役であり、三つの関係を調和的にする責任を担う。三つの関係については以下に詳しく解説する。

まず一つ目のパラヒャンガン（Parahyangan）であるが、宗教的・精神的な側面での人間と神との繋がりを表す。人間は神を崇めることによって、精神的な調和を感じて、幸せが訪れる。このパラヒャンガンの精神の現れは農耕儀礼に現れる。農耕儀礼とは稲の生長に伴い、各作業の際行われる儀式である。

米作りにおいて、バリのヒンドゥー教は水の神様（デワ・ウィスヌ）と稲の神様（デウィ・スリ）は重要な位置を占める。水の神様は男神であり、稲の神様は女神であり、この二つの神が一つになると、「肥沃」を意味する。この男神と女神を祀ることで、稲が無事に育ち、豊作に恵まれることを祈願するという意味になるのである。そのために、以下の農耕儀礼が順次行われている。

農耕儀礼の目的は、農作業の節目ごとに儀礼を行い、この儀礼をとおして豊作の祈願と神への感謝の気持ちを伝えることである。こうした儀礼は、バリのヒンドゥー教の日常生活に欠かせない儀礼である。表3で示した農耕儀礼は、ジャティルイ村で年に1回収穫される在来品種の赤米の栽培に伴って行われる儀式である。儀式は太陰暦に基づいて行われる。「緑の革命」以降は、バリで

表3 農耕儀礼

番号	農作業時期	儀式の名称	儀式の内容
1	9月	Mapag Toya (マパグ・トヤ)	耕耘が始まる前に行われ、水源から水を迎える儀式である。「mapag」は「迎える」、「toya」は「水」を意味する。
2	11月	Ngurit (ングリット)	苗代を作る際に行われる儀式。
3	1月上旬	Ngerasakin (グラサキン)	耕耘の終了後、田植えの開始直前に行われる水田の浄化儀式。
4	1月上旬	Nuwasen (ヌワセン)	田植え開始する時に行われる儀式。「nuwasen」は吉日を見つけて、作業を開始することを意味する。
5	2月、田植え後の42日間目	Ngekambuhin (ングカンブイン)	植えた苗が無事に育つために行われる儀式。
6	2月	Pamungkah (パムンカー)	苗が無事に育つために行われる儀式。
7	3月	Penyepian (プニユビアン)	「Penyepian」はバリ語の「Nyepi」から由来して、「静寂」を意味し、ヒンドゥー教の新年「静寂の日」に農作業を当てはめて、農作業をしない日。稲が病気や害虫から守られ、無事に育つために祈願する。
8	3月または4月	Nyegara Gunung (ニュガラグヌン)	Nyegara は「segara」という「海」からできた言葉で、gunung は「山」からできた言葉である。肥沃な土壌や豊作に恵まれることを願って、山や海の神様に感謝する儀式。
9	4月	Mesaba (ムサバ)	スバック寺院で挙げる感謝の儀式、神饌の下がり物で行われる供食儀礼。
10	6月上旬	Ngadegang Batari Sri (ンガドゥガンバタリスリ)	わらで作られた「デワ・ニニ」という稲の神様を表す人形を田圃に安置し、無事に収穫を迎えるために稲の神様に感謝する。「Ngadegang」は「安置する」、「Batari Sri」は「デウィスリ」と同じ、稲の神様、という意味。
11	6月上旬～中旬	Nganyarin (ンガニヤリン)	収穫を開始する前に行われる儀式である。「nganyarin」は「anyar」からできた言葉で、「新しい」という意味。
12	7月下旬～8月	Mantenin (マントゥニン)	乾燥した稲を米倉に入れ、保管する儀式。「mantenin」は「供える」という意味。

も年に2期作や3期作ができる高収量品種の栽培が行われており、ジャティルイ村以外ではこのような年1回栽培されていた頃の農作儀礼を全て行う所は少なくなった。

二つ目のパウォンガン (Pawongan) は、社会的な側面での人間と人間との繋がりを表す。人間同士の繋がりが調和すると、幸せが訪れる。具体的には、スバックの中での様々な農作業や宗教儀礼の準備を含めて、全てはバリ語でンガヤー (Ngayah) という無償の相互扶助のなかで行われる。こうした共同の作業を行うことで、血縁関係だけでなく地縁関係の紐帯も強まる。農作業や宗教的儀式だけでなく、村の住民たちが主催する通過儀礼や冠婚葬祭も全てはンガヤーというバリの相互扶助で済ませる。バリでは業者に頼んで、お金を払って儀式を済ませる習慣はない。様々な儀式が多く行われるからこそ皆が「お互い様」の精神を持ち、助け合うことで人と人の繋がりが生まれ、絆が強まっていく。

三つ目のパルマハン (Palemahan) は、自然環境の側面での人間と環境の繋がりを表す。人間と環境が調和すると、幸せが訪れると信じられている。スバックの活動内容を見ると、水管理や水の公平な分配だけでなく、雨季と乾季の田植えの輪番制が行われている。また、肥料の使用についても、化学肥料より堆肥のような有機肥料が優先的に使用されており、農薬の使用も控えられている。また、農業の機械化が進んでいないバリでは、収穫の際ほとんどが鎌を使って、手作業で行われている。切り残されたわらは灰になるまで燃やされ、その灰は土壌の肥料になる。このようにして、農家は化学肥料の使用を最小限に抑えることができる。また、輪作することで土壌の疲弊を避けることができ、病害虫の予防につながり、自然環境を保全することができる。ジャティルイ村で耕作放棄や農地を宅地にするという土地の利用目的の変更はほとんどない。ジャティルイ村では代々受け継がれてきたバリの赤米を今も栽培し続けている。

「トリ・ヒタ・カラナ」のなかでは、パラヒャンガン、パウオンガン、パルマハンという三つの関係を大切にすることで、この世の調和を実現することができ、人間は喜びを感じ、幸せに過ごすことができるということが説かれている。

3. 世界遺産登録に伴う観光振興

3.1 ジャティルイ村の概要

「ジャティルイ」という村の名前はバリ語の「ジャトン (Jaton)」、「ルイ (luwih)」に由来し、それぞれ「お守り」、「優れる」という意味である。つまり、ジャティルイ村は「魔法の力の強いお守りを持っている村」となる。そして、そこから転じて「もっと豊かで、もっと素晴らしい村」という意味になる。

ジャティルイ村はバリ州、タバナン県、プヌブル郡にある。タバナン県の県庁所在地、タバナン市から約26キロ、車で約50分の距離にある。プヌブル郡の中心からでも約14キロ離れており、車で30分かかる。ジャティルイ村はバトゥカウ山の麓、海拔700メートルの高さにあり、とても涼しい気温である。ジャティルイ村の農業は水田稲作が中心であり、特にバリ在来品種の赤米の栽培は代々受け継がれている。また、古来から伝わるバリの農耕儀礼は今でも行われている。ジャティルイ村の赤米はジャティルイ米という名前で販売されており、バリの市場で高く評価されている。

ジャティルイ村で「緑の革命」による高収量品種の導入後も在来品種の赤米が栽培され続けてきたのは、スバックが今日でも機能し続けてきたからである。つまり、水の公平な分配にとどまらず、赤米の栽培を定めたスバックの慣習法がスバックのメンバーによって守られてきたからである（永野 2012）。棚田をはじめ、トリ・ヒタ・カラナの精神に基づき伝統的な農業を維持して環境を保全してきた地域として、ジャティルイ村の名前が世界的に知られるようになった。世界遺産の登録後は、日本でもスバックやジャティルイ村の棚田が知られるようになり、国際的な交流も始まっている³⁾。以下では、世界遺産の登録がジャティルイ村の観光にどのような影響を及ぼしたかについて考察する。

3.2 世界遺産の登録と観光客の急増

ジャティルイ村が世界遺産に登録された後の最も大きな変化は観光客の急増である。図1は、観光客数が一年で最も多い8月のジャティルイ村を訪れた観光客数の推移である。データからは、世界遺産の登録後の2012年8



図1 外国人観光客の推移 各年8月
出典：ジャティルイ村役場の資料より筆者作成

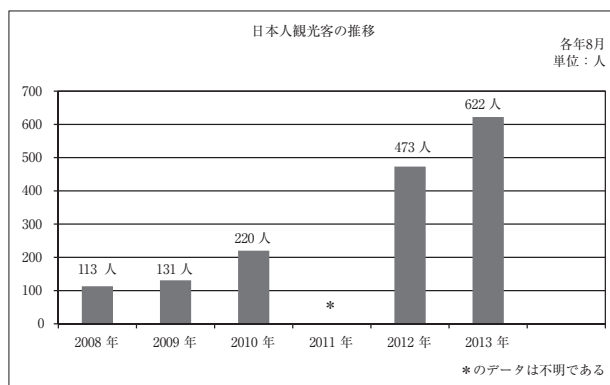


図2 日本人観光客の推移 各年8月
出典：ジャティルイ村役場の資料より筆者作成

月に、ジャティルイ村を訪れる観光客数が大幅に増加したことが分かる。ただし、世界遺産に登録される前からジャティルイ村を訪れる外国人観光客は、2008年3,260人、2009年5,646人、2010年7,181人、2011年8,695人と徐々に増加していた。つまり、2008年から2011年にかけて観光客数は毎年平均2千人ぐらいつつ増加していた。だが、世界遺産の登録後は、その数が大幅に増加し、2012年に10,744人だった観光客数が、2013年に約7千人増えて17,325人になり、2014年にはさらに約9千人増えて、26,190人になった。こうして、2012年に世界遺産に登録されてから僅か2年の間に観光客数は2倍以上に増加した。また、世界遺産の登録以前の2008年と比較すると6年間で8倍以上に増加しており、すさまじいばかりの世界遺産効果を示している。

ジャティルイ村を訪れる観光客は欧米人が最も多く、日本人はまだ少ないが、年々増加している（図2）。2008年8月に日本人観光客数は113人だったが、世界遺産登録後の2013年8月には622人になり、5年間で約6倍に増加した。日本人観光客の急増は、ジャティルイ村の棚田が世界遺産登録後、日本でも知られるようになったことによる。日本人観光客の増加はメディアによる宣伝と関連する。ジャティルイ村は世界遺産としてどのように



写真1 農道を散策して、田園風景を楽しむ外国人観光客
(筆者撮影)

宣伝され、日本人観光客の関心を惹いているのか以下の活字メディアや電子メディアを用いた宣伝を事例に分析する。

3.3 メディアの宣伝と世界遺産

この節では、日本人観光客向けの活字メディアと電子メディアの事例を取り上げ、ジャティルイ村がどのように宣伝されるのか、そして世界遺産のブランドの効果について考察してみたい。

本稿で取り上げる事例は以下のとおりである。事例Aは、現地バリ島でよく見かけるフリーペーパーである。事例Bと事例Cは、日本で市販される代表的なトラベルマガジンであり、事例Dと事例Eは電子メディアである。以上5つの事例を取り上げて、ジャティルイ村がどのように紹介されるのかを見てみる。いずれの事例も、バリにある世界遺産地域としてジャティルイ村を宣伝している。

【事例A】『バリ島情報誌ぶか』(edition No.89 2014 Aug-Sep) より

「ユネスコの世界文化遺産に登録SUBAK」

まだ記憶に新しい2013年のニュースといえば、日本を象徴する国内最高峰の富士山(3776m)がユネスコの世界文化遺産に登録されたこと。実はバリでも2012年、島初の世界遺産が誕生しました。ユネスコの世界文化遺産に登録された「SUBAKースバック(水利システム)」は村や集落ごとに形成される伝統的な水利組合でバリヒンドゥー教のTri Hita Karana(トリ・ヒタ・カラナ…神と人・人と人・人と自然という三者の調和を重んじる教え)の哲学に基づき棚田の公平な水の分配を行っています。世界遺産に登録されたタマンアユン寺院を含む19,500ヘクター

ルに及ぶ5つの棚田地域は景勝地として有名なので旅中に一度訪れてみては。

【事例B】『まっふるバリ島』(2014) より

美しいライステラスに大感動！

バリ中部のタバナン県にある丘陵地帯、ジャティルイは、2012年にバリ島で初めて登録された世界遺産地域のひとつ。見渡す限り広がる芸術的なライステラス(棚田)は、言葉にならないほど美しい。ずっと昔から受け継がれてきた先人たちの知恵や信仰が生み出した、この景色の尊さを感じます。

水利システム「スバック」とは？

神・自然・人間の三つの調和が幸福を生み出す、というバリ・ヒンドゥー教の哲学「トリヒタカラナ」。この精神をもとに生まれた「スバック」は、水の平等な分配等を目的とした水利組合のこと。農地の管理や整備はもちろん、豊穡を祈願する宗教儀式なども農民同士で協力して行うことで、人間と自然、神との調和を図ってきた。その文化的価値は高いとして、スバックに関連する寺院や棚田地帯5ヵ所が、2012年に世界遺産に登録された。

【事例C】『地球の歩き方MOOK バリ島の歩き方』(2015) より

「絵画のような風景に溶け込むバリの世界遺産めぐり」

田園風景やのどかな農村地帯、自然に対する信仰が息づく寺院など、バリの世界遺産は心癒す要素で満ちている。昔ながらの風景に触れる、豊かな時間を！

バリの世界遺産は、「バリ州の文化的景観：トリヒタカラナ哲学の現れとしてのスバック体系」として、2012年にユネスコ世界遺産に登録された。1万9500ヘクタールにも及ぶ4つのエリアに点在する、田園風景や寺院が指摘されている。それらの場所すべてに、バリ人たちの調和の哲学と水利システムが息づいているポイント！

トリ・ヒタ・カラナとは信仰の哲学のひとつで、神、人間、自然の調和がコンセプト。

その精神はバリ人の生活に自然に取り込まれている。

スバックとは灌漑水利システムの伝統的な管理組合

のこと。川や泉から水を引き、水田に均等に分ける。バリ島内に1200以上もあり、1000年以上も維持されている。

見渡すかぎり田園の海が広がる！ジャティルイ、バトゥカル山の麓に位置する田園地帯。360度、どこまでも広がっていくかのようなライステラスはとにかく見事。

こんなに芸術的な絶景をこつこつと作り出した農民に感謝！

【事例 D】 阪急トラベルコムのサイト（www.hankyu-travel.com 2014年 8 月 3 日）より

バリの文化的景観：独自の哲学が創り上げた美しい棚田の景観

ジャワ島の東に浮かび、「神々が住む島」とも呼ばれるインドネシアのバリ島。その内陸部の山の斜面には、椰子の木に囲まれた美しい棚田が幾重にも重なっています。2012年、水の女神が住むと考えられている「バリの水がめ」バトゥール湖、女神を祀るウルン・ダヌ・バトゥール寺院、ペクリサン川流域のスバック（棚田）の景観、バトゥカウ山保護地区スバック（棚田）の景観、タマン・アユン寺院の5つの資産が世界文化遺産に登録されました。これらは神と人、人と人、人と自然の調和を重んじるバリ・ヒンドゥー教の「トリ・ヒタ・カラナ」の哲学に基づき、水を神と崇めるバリの人々が長い年月をかけ創り上げ、受け継いできたものです。

「トリ・ヒタ・カラナ」の哲学は、2000年以上も前にバリとインドの文化的交流の中で生まれ、9世紀にはその哲学をもとに、水を管理し棚田を守る水利組織「スバック」が作られました。現在もバリ島内には多くのスバックがあり、それぞれが寺院を保有しています。水源から流れてきた水は一旦寺院で清められ、神聖な水として農民たち自らが手掘りで切り拓く水路を通り、各水田に平等に分配されています。

現地でライステラスと呼ばれる棚田は、美しく神秘的で、「神様の階段」とも称されています。白砂のビーチが続くリゾート地から少し足を延ばせば、そこにはバリの農民たちがいにしえから受け継ぎ守ってきた、心に響く風景が広がっています。

【事例 E】 バリ島旅行コムのサイト（www.balitouryokou.com 2014年 8 月 3 日）より

com 2014年 8 月 3 日）より

ジャティルイ・ライステラス（世界文化遺産）

ジャティルイ（Jati Luwih）は、バリ島中部タバナン県、バトゥ・カウ山のふもとに広がる丘陸地帯です。山と深い溪谷が連なるこのエリアには、一面に棚田（ライステラス）が広がり、訪れる人々を魅了します。

ほとんど平らな場所がなく、水の便も悪いこの土地に拡大な棚田を築き上げたのは、バリ島に1000年以上も前から伝わるスバックという伝統的水利システムのたまもの。スバックは単なる水利組合ではなく、「神と人間、自然と人間、人間と人間の三つの調和が取れた時に真の幸福が訪れる」というヒンドゥー教の哲学・トリ・ヒタ・カラナを具現化した、灌漑事業、農耕事業、土木事業などいろいろな活動を行う組合なのです。

ジャティルイをはじめとした、バリ島独自の水利システム「スバック」による棚田地域の文化的景観は2012年ユネスコの世界文化遺産に選ばれました。

【5つの事例の分析】

ジャティルイ村を日本人観光客に紹介した五つの事例には、次のような共通点がある。すなわち、世界遺産に関する知識と、ジャティルイ村にある棚田の美しさを表現して、観光客の関心を惹きつけようとしている点である。

まず、第一の共通点である世界遺産に関する知識であるが、どの事例でも、「世界遺産」「スバック」「トリ・ヒタ・カラナ」は重要なキーワードとして欠かさず登場している。次に、バリ島の世界遺産に関する情報・知識が記述されている。たとえば、バリ島の世界遺産の正式な名前、登録された年、面積、そして世界遺産の対象となるスバックやトリ・ヒタ・カラナについて説明される。そのなかで、スバックは「水利システム」、「灌漑水利システム」、「水利組織」、「水利組合」と訳されて、「スバック」という片仮名表記とともに記述されている。さらにスバックを説明する際に、「伝統的な水利組合」、「棚田の公平な水の分配」、「水の平等な分配」、「水の管理」、「農地、棚田の管理」、「トリ・ヒタ・カラナの哲学に基づく公平な水の分配」といった表現が用いられている。次に、トリ・ヒタ・カラナであるが、この言葉について説明する際に、それはヒンドゥー教の哲学であることがまず記述される。続いて、トリ・ヒタ・カラナ

の意味は、「神と人・人と人・人と自然という三者の調和を重んじる教え」、「神、人間、自然の調和のコンセプト」、「神・自然・人間の三つの調和が幸福を生み出す哲学」、「神と人間、自然と人間、人間と人間の三つの調和が取れた時に真の幸福が訪れるというヒンドゥー教の哲学」と説明される。どの事例でも、「調和」、「幸福」そして「神、人、自然」という三つの要素が必ず述べられている。こうしたいわば世界遺産に関する基礎知識を加えることによって、観光客にその魅力を伝えようとしている。さらに、世界遺産に登録された地域の美しさを言葉で表現することによって、ますます観光客の関心を惹きつけようとしている。

たとえば、ジャティルイ村にある棚田の美しさは次のように表現されている。「景勝地」、「絵画のような風景」、「芸術的な景色」、「見渡すかぎり田園の海が広がる」、「見渡す限り広がる芸術的なライステラス」、「美しく神秘的」、「神様の階段」、「心に響く風景」等である。このように表現することで、情報誌を読む人やサイトを閲覧する人は、ジャティルイの棚田に対するイメージを膨らませることができる。観光客にとって、「世界遺産」という言葉だけでも十分に魅力的だが、それに加えてその世界遺産に関する情報・知識やその美しさを様々な言葉で表現することによって、世界遺産のもつ魅力が一段と膨らむことになる。

このようにバリ島初の世界遺産が誕生したことで、世界遺産に関心のある観光客を対象とするツアーも組み立てられるようになった。バリ島世界遺産めぐりツアーも出現し、ジャティルイ村はそのツアーに組み込まれるようになった。ここでは、ツアー A、ツアー B とツアー C、という三つのツアーを紹介する。

【ツアー A】 アクティビティズ H.I.S. パケーション
ムのサイト (activities.his-vacation.com
2014年 8 月 3 日) より

(ツアー時間 08:30~18:00)

ホテル発

タマン・アユン寺院

ジャティルイの棚田を散策

ランチ (世界遺産の棚田を見ながら、インドネシア
ンビュツフェ)

チャンディクニン市場

ウルンダナウブラタン寺院

ホテル帰着

【ツアー B】 チェックインバリコム 사이트 (http :
//www.checkinnbali.com 2014年 8 月 3
日) より

(ツアー時間 08:30~21:00)

ホテル発

スバック博物館

ジャティルイの棚田

ライステラスの景勝地でランチ、インドネシアンビ
ュツフェ

タマン・アユン寺院

タナ・ロット寺院見学

お土産専門店で買い物

人気ホテルで夜景ディナー

ホテル着

【ツアー C】 バリサヤツアーコム 사이트 (bali-
saya.com 2014年 8 月 3 日) より

(ツアー時間 12:00~22:00)

ホテル発

タマン・アユン寺院

ジャティルイのライステラス

タナ・ロット寺院

ケチャダンス観賞

ディナー

これら三つのツアーは、内容や時間も様々であるが、いずれもツアーのなかにジャティルイ村が入っている。ジャティルイ村がこのようなツアーのなかに組み込まれるようになったのは、世界遺産に登録されてからである。ツアーのなかで、ジャティルイ村は「ジャティルイの棚田」、「ジャティルイのライステラス」と表記されている。ツアー A とツアー B では、観光客はジャティルイ村で棚田を観賞するだけでなく、昼食もすることになっているため、ジャティルイ村の滞在時間は他の観光地と比べて長く組まれており、存分に棚田の景観、農村地帯の風景を楽しめる。バリのツアーはツアー A とツアー B のように午前中から開始するのが一般的だが、午前のツアーに参加できない人は、ツアー C のように午後からのツアーに参加することができる。

このように世界遺産に登録されたジャティルイ村は、メディアのなかで宣伝されるようになり、ツアーのなかに組み込まれるようになった。観光客が増加し、観光振興につながったのは、世界遺産というブランドを前面に打ち出したこうした活字メディアや電子メディアの積極

的な宣伝と無関係ではなからう。

4. 観光振興のための管理運営組織 ：持続可能な観光を目指す政策と課題

4.1 ジャティルイ村の観光管理の組織化

世界遺産に登録されてから、ジャティルイ村の知名度が高まり、国際的な観光地として知られるようになった。棚田や農村の風景を楽しむために訪れる観光客も年々増加し続け、ジャティルイ村は農業だけでなく、観光業からも収入を得られるようになった。しかし、農業を犠牲にしての観光業では、棚田の景観を守ることはできない。そこで、農業と観光業を両立させた持続可能な観光振興を目指すことが必要となる。

その一環として地方自治体条例2013年84号に基づき、2014年2月13日にタバナン県知事によって、タバナン県レベルの「ジャティルイ観光管理運営組織（Badan Pengelola Daya Tarik Wisata Jatiluwih）」が設立された。そして同時に、ジャティルイ村レベルで「ジャティルイ観光運営マネジメント組織（Manajemen Operasional Badan Pengelola Daya Tarik Wisata Jatiluwih）」も設立された。県レベルのジャティルイ観光管理運営組織の構成は、図3のとおりである。この組織の総長はタバナン県知事、副総長はタバナン県副県知事、監督部の部長は

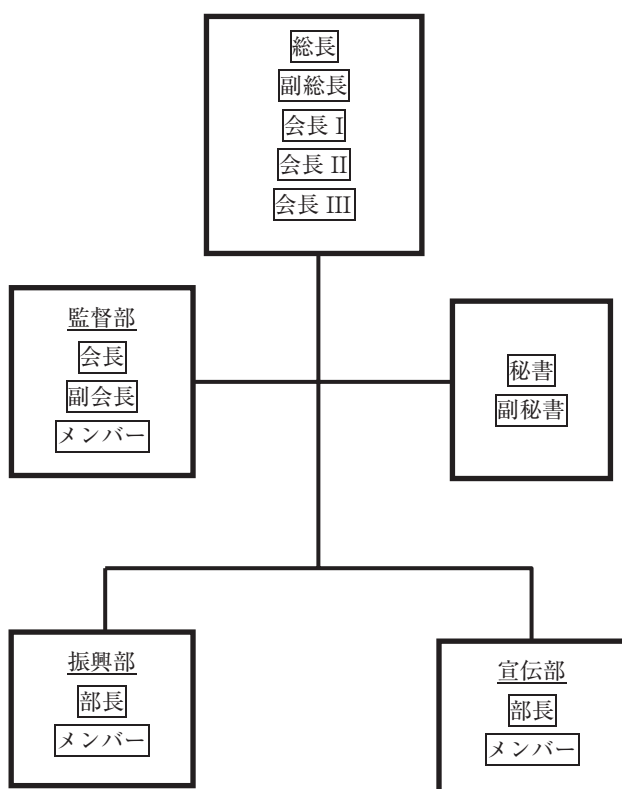


図3 ジャティルイ観光管理運営組織の構成（県レベルの組織）
出所：ジャティルイ村役場の資料より筆者作成

経済・開発タバナン県地方自治体官房長、振興部の部長は地方開発企画庁の庁長、そして宣伝部の部長は文化・観光局長である。このように、この組織のほとんどの役員は、タバナン県の行政機関の公務員で、ジャティルイ村の代表としては、村長が監督部の副部長に就いている。こうした県レベルの組織とは別に、現場の観光運営は、村レベルの組織である「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」によって行われる。この組織の構成は県レベルの「ジャティルイ観光管理運営組織」とは異なり、全ての役員はジャティルイ村の住民である（図4参照）。

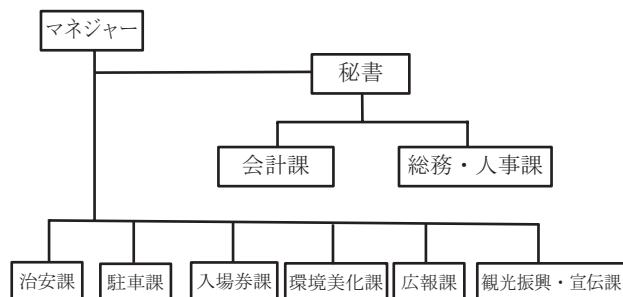


図4 「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」の構成（村レベルの組織）
出典：ジャティルイ村役場の資料より筆者作成

ジャティルイ村の観光振興を図るために、県レベルの組織と村レベルの組織が同時に設立されて、それぞれ異なる役割を果たしている。「ジャティルイ観光管理運営組織」は、バリ州の第2級地方自治体県レベルの組織で、ジャティルイ村の観光振興を指導する役割を担う。「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」は、村レベルの組織で、ジャティルイ村の観光振興を直接運営し、現場での様々な課題に取り組む役割を担う。このように役割が異なる二つの組織があることから、ジャティルイ村における観光振興は一方的に県のレベルで指導されているだけでなく、現地コミュニティが観光振興に積極的に関わっていることが分かる。以下では、村レベルの観光振興に着目し、観光と農業を両立させるための具体的な政策を紹介する。

4.2 ホームステイ型の民宿

ジャティルイ村では、外部資本による観光開発ではなく、住民を担い手とする観光振興を目指している。具体的には、外資による大型ホテルの建設ではなく、住民によるホームステイ型の民宿で宿泊を希望する観光客に対応しようとしている。そうすることで、観光客側からみると、現地の人々との交流ができ、農家生活を体験することができる。民宿は、現地の人々にとっても、観光収

入が直接現地住民の収入につながるという経済効果を期待できる。また、ホームステイ型の民宿は、ほとんど住民の敷地につくられるため、農地の利用目的を変化させずにすみ、農地の売買を最小限にとどめることで環境保全にもつながる。2014年8月の調査の際には、既にいくつかの住民の敷地にホームステイ用の民宿が建設されつつあった。こうした傾向は、現在も進行中と考えられる。

4.3 ジャティルイ景観の楽しみ方と各種料金

ジャティルイ村の棚田が世界遺産に登録されてから、観光客数が増加しただけでなく、様々なアクティビティを楽しむことができるようになり、世界遺産の登録以前よりも観光客が村に滞在する時間が長くなっている。それに対応するため、観光に関連する各種料金が定められた（写真2、右は筆者の日本語訳）。

「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」が設立される前は、観光客は村に入場する際、入場料と駐車料金だけ払えば充分であった。しかし、棚田の周辺を散策する場合には、散策できる農道の入り口で追加料金が請求されていたため、観光客は二重に払わされているように感じて、ジャティルイ村にネガティブな印象をもたざるをえなかった。こうした問題に対して、「ジャティルイ

観光運営マネジメント組織」が設立されてからは、入場料に散策料金も含めて一緒に徴収されるようになった。

ジャティルイ村で、楽しめるアクティビティも多様化している（写真2参照）。観光客は棚田を眺めて、写真を撮るだけにとどまらず、映画の撮影、サイクリング、フォトウェディング、キャンプなどのアクティビティが楽しめる。こうした多様な活動に合わせて、観光客から料金を徴収することが2014年4月1日から実施されている。以前、観光客は入場料とトレッキング料と駐車料さえ払えば充分だったが、今はアクティビティする毎に、料金が加算される。観光客だけではなく、観光客から収入を得る屋台やレストランも毎日ゴミ代を支払う。屋台の場合は1,000ルピア、レストランの場合は5,000ルピアである。このようにして、ジャティルイ村での楽しみ方の多様化にともない、観光収入も多様化した。

観光客の増加やアクティビティの多様化に対応した各種料金が定まったことで、ジャティルイ村の観光収入はかなり増えている。観光収入は、まずジャティルイ村の「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」の役員や会員の給料分が引かれた後、タバナン県45%、ジャティルイ村55%の割合で分配される。そして、さらにジャティルイ村の収入は、ジャティルイ行政村25%、スバック25%、ジャティルイ慣習村30%、グヌンサリ慣習村20%

RETRIBUSI TEMPAT REKREASI DAN PARKIR	観光地に関する各種料金および駐車料金
<p>Berdasarkan Keputusan Ketua Umum Badan Pengelola Daya Tarik Wisata Jatiluwih No. 02 Tahun 2014, maka Retribusi Tempat Rekreasi dan Parkir di Wilayah Daya Tarik Wisata Jatiluwih ditetapkan sebagai berikut :</p> <ol style="list-style-type: none"> Tiket Masuk <ul style="list-style-type: none"> - WNA Dewasa : Rp 20.000 - WNA Anak-Anak : Rp 15.000 - WNI Dewasa : Rp 10.000 - WNI Anak : Rp 5.000 Karcis Parkir <ul style="list-style-type: none"> - Roda 6 : Rp 10.000 - Roda 4 : Rp 5.000 - Roda 2 : Rp 2.000 Lain-Lain <ul style="list-style-type: none"> - Shooting Film Asing : Rp 5.000.000 - Shooting Film Domestik : Rp 3.000.000 - Foto Prewedding Asing : Rp 300.000 - Foto Prewedding Domestik : Rp 100.000 - Foto Komersial : Rp 500.000 - Perkemahan Sekolah : Rp 100.000/hari - Perkemahan Wisata : Rp 250.000/hari - Bersepeda : Rp 5.000 - Kebersihan Warung : Rp 1.000/hari - Kebersihan Rumah Makan : Rp 5.000/hari <p>Restoran Demikian disampaikan, atas perhatian & kerjasamanya diucapkan terima kasih</p> <p>Jatiluwih, 31 Maret 2014 Ketua Umum Badan Pengelola DTW Jatiluwih ttd (Ni Putu Eka Wiryastuti)</p>	<p>ジャティルイ観光管理運営組織の総長決定2014年第2号に基づき、観光地における各種料金および駐車料金を以下のように決定した。（全ての料金はインドネシアの通貨単位、ルピア（Rp）で表記される。1円は約Rp103 2014年12月現在）。</p> <ol style="list-style-type: none"> 入場料 <ul style="list-style-type: none"> －外国人（大人） : Rp 20,000 －外国人（子ども） : Rp 15,000 －インドネシア人（大人） : Rp 10,000 －インドネシア人（子ども） : Rp 5,000 駐車料金 <ul style="list-style-type: none"> －6輪車 : Rp 10,000 －4輪車 : Rp 5,000 －2輪車 : Rp 2,000 その他 <ul style="list-style-type: none"> －外国人による映画撮影 : Rp 5,000,000 －インドネシア人による映画撮影 : Rp 3,000,000 －外国人のプレウェディング撮影 : Rp 300,000 －インドネシア人のプレウェディング撮影 : Rp 100,000 －商業用の写真撮影 : Rp 500,000 －学校のキャンプ : Rp 100,000(1日) －観光用のキャンプ : Rp 250,000(1日) －サイクリング : Rp 5,000 －屋台のゴミ代 : Rp 1,000(1日) －レストランのゴミ代 : Rp 5,000(1日) <p>各種料金のお知らせは以上です。ご協力ありがとうございます。</p> <p>ジャティルイ2014年3月31日 ジャティルイ観光管理運営組織 総長 (ニ・プトウ・エカ・ウィリヤストゥティ)</p>

写真2 「ジャティルイ観光管理運営組織」が定めた各種料金（筆者撮影）

と分配される。「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」が設立されてからはじめて、スバックは25%の分配を与えられるようになった。スバックは、この収入をスバックが主催する様々な儀式やスバック寺院の改修工事、水路や農道のメンテナンスに充てている。こうすることで、スバックのメンバーである農家の金銭的な負担が軽減され、このことが間接的に農業の維持にもつながっていると考えられる。

4.4 持続可能な観光を目指す課題

ジャティルイ村が目指す持続可能な観光の実現は、現在多くの課題に直面している。そのなかで、今最もジャティルイ村の「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」で議題にされているものを二つ紹介する。

まず一つ目の課題は、観光客の増加に伴う入場料の値上げである。世界遺産登録以前の外国人観光客の入場料は、一人1万ルピアで、インドネシア人は無料であった(永野2012)。だが、世界遺産に登録されてからは、インドネシア人も有料になり、外国人観光客の入場料は1万5千ルピアに値上がりした。2014年4月には外国人観光客の入場料は、さらに値上げして2万ルピアになり、世界遺産以前の2倍になったが、今後は3万ルピアまでは上がることが予定されている。その理由は、同じタバナン県にある代表的な観光地タナー・ロット寺院(夕日の名所として知られている)の入場料が3万ルピアだからである。世界遺産になってから、ジャティルイ村もタバナン県の観光地の目玉として、タナー・ロット寺院と肩を並べており、入場料もタナー・ロット寺院と同じくするのが当然だと考えられていることが分かる。入場料の値上げの理由は、観光施設を充実させ、サービスを向上するためとされている。



写真3 外国人大人用の入場券(筆者撮影)

二つ目の課題は、観光客の増加によって、車で道が混み合い、駐車スペースが足りなくなっていることである。そこで、駐車場の整備や道路の拡張の必要性が議論されている。しかし、駐車場を整備したりや道路を拡張

すると農地の利用目的の変更が避けられず、景観を害する恐れがある。



写真4 田園風景を楽しめるレストランと狭い道が車で溢れる様子(筆者撮影)

こうした議論は観光客の増加にともなう観光収入の増加という経済的効果に関するものであるが、観光振興を図りながら、世界遺産として登録された棚田を長期的にどう保全していくかという観光と農業の両立に関連する最も重要な課題といってもよい。ジャティルイ村の「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」は、こうした持続可能な観光についての課題をめぐって、現在もお議論を続けている。

おわりに

世界遺産の登録は現地コミュニティに様々な影響を及ぼす。バリ島初の世界遺産に登録されたジャティルイ村を事例とする本稿の考察からは、以下のことが明らかにされた。①世界遺産に登録後、観光客数は飛躍的に増大し、欧米人だけでなく日本人観光客も増加している。②こうした観光客を誘致するために、活字メディアや電子メディアは、文化的景観としてのジャティルイ村の特色を強調し、世界遺産というブランドのもつ魅力を積極的に生かした宣伝を行っている。③ジャティルイ村の世界遺産は、棚田の景観のみならず、トリ・ヒタ・カラナというバリのヒンドゥー教の哲学の精神に基づいて運営されるスバックシステムである。④こうした世界遺産登録後の観光振興は、タバナン県という上位の行政による一方的な指導によって行われているわけではない。ジャティルイ村では、タバナン県の指導を受けながらも、「ジャティルイ観光運営マネジメント組織」という現地コミュニティの住民をメンバーとする組織を立ち上げ、自主的な管理運営を行っている。持続可能な観光のための課題は多いが、ジャティルイ村では、農業と観光業の両立を実現するための議論を今もお続けており、解決に向けての努力に期待したい。

注

- 1) バトゥカル山はバトゥカウ山とも呼ばれる。山の形はコナツツの殻に似ているから名づけられた。バトゥカル山の高さは2,267メートル、バリ島で2番目高い山である。
- 2) バリ世界遺産は2012年6月24日～7月6日にロシアのサンクトペテルスブルクで行われた第36回世界遺産委員会の時に決められた。
<http://whc.unesco.org/archive/2012> 2014年10月3日取得。
- 3) たとえば、日本の富山市とタバナン県との交流では、互いに環境を学び合い、ジャティルイ村に小型の水力発電を整備することの支援を決めている（北日本新聞2014年3月20日、3月22日、4月1日、4月4日）。

参考文献

- Dewi, Made Heny Urmila, 2013, “Pengembangan Desa Wisata Berbasis Partisipasi Masyarakat Lokal di Desa Wisata Jatiluwih Tabanan, Bali,” *Kawistara*, Vol.3, No. 2, 117–226.
- 井澤友美, 2012, 立命館大学人文科学研究所紀要 (98号),『インドネシア・バリ州におけるサステナブル・ツーリズムの実践—トリ・ヒタ・カラナをめぐる政策と政治—』
- 古田陽久・古田真美, 2007,『世界遺産入門 —ユネスコから世界を学ぶ—』シンクタンクせとうち総合研究機構。
- 永野由紀子, 2009,「スバック」(186–7) 倉沢愛子・吉原直樹編,『変わるバリ 変わらないバリ』勉性出版。
- , 2012,「インドネシア・バリ島の水利組織（スバック）における人間と自然の共生システム—タバナン県ジャティルイ村の事例—」,『専修人間科学論集』 Vol.2, pp.81–98.
- 佐藤悦夫, 2013, 富山大学現代社会学部紀要 第5巻 (2013.3),『世界遺産の現状と課題に関する一考察』。
- 新井直, 2008,「世界遺産登録と持続可能な観光地づくりに関する一考察」『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会) 第11巻 第2号 2008年9月 pp.39–55
- Widia, I Ketut, 2010, *Pecalang : Benteng Terakhir Bali*, Paramita.
- Wiana, I Ketut, 2007, TRI HITA KARANA MENURUT KONSEP HINDU, PARAMITA.
- 山下晋司, 2009,『観光人類学の挑戦 —「新しい地球」の生

き方』講談社デジタル製作部。

参考資料

- バリ島情報誌ぶか (edition No.89 2014 Aug–Sep) 「癒しの楽園」(無料バリ島情報誌)
- BUKA GOH ガルーダ オリエント ホリデーズ
まっぷるバリ島, 2014, 昭文社。
- 地球の歩き方 MOOK バリ島の歩き方 2015, ダイヤモンド社。
- Keputusan Manager Manajemen Daya Tarik Wisata Jatiluwih Nomor 01 Tahun 2014 Tentang Daftar dan Uraian Tugas Tenaga Kerja Daya Tarik Wisata Jatiluwih
- Rincian Pendapatan Pengelolaan Daya Tarik Wisata Jatiluwih Januari s/d April 2014
- Bagan Struktur Organisasi Manajemen Operasional Daya Tarik Wisata Jatiluwih

参照 URL

- <http://whc.unesco.org>
- <http://www.unesco.or.jp>
- <http://penebel.tabanankab.go.id/desa-jatiluwih/>
- <http://activities.his-vacation.com>
- <http://www.checkinnbali.com>
- <http://bali-saya.com>
- <http://www.hankyu-travel.com/heritage/indonesia/bali.php>
- <http://www.balitouryokou.com/>

付記 本稿は、平成23～25年度の日本学術振興会（基盤研究C）「生活保障組織としての家族・親族・近隣に関する比較研究：バリ島と日本の事例」（代表：永野由紀子）および公益財団法人旭硝子財団の平成25～27年度のステップアップ研究助成「インドネシア・バリ島の水利組織（スバック）における人間と自然の共生システムの多様性と弾力性」（代表：永野由紀子）による研究助成を受けています。慣習村長や行政村長はじめジャティルイ村の住民には多くの時間をさいて現地調査に協力いただき、お世話になりました。また、永野先生にはジャティルイ村の現地調査から論文執筆に至るまでご指導いただきました。この場をかりて心からお礼申し上げます。